

# 武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2022.2.9 No.13



## 第 16 回研究大会、開催迫る。全てオンラインによる開催とします。

コロナ禍、オミクロン株が猛威をふるう中ですが、第 16 回大会がもうすぐ開催されます。

昨年と同じように会場とオンラインのハイブリット開催を予定していましたが、理事会で現状を分析して大会をすべてオンラインで開催することにしました。まだ参加申し込みをされていない方は、至急申し込み手続きをお願いいたします。参加申し込みの締め切りは、2月14日（月）です。

大会要項は、前回のニュースレター12号でお知らせした通りです。自由研究発表の申し込みは、9名の方からありました（1/31現在）。詳細は、後日お知らせしますので、今回はタイトルと発表者の紹介をさせていただきます。多彩な内容になっています。

大会関係の資料及び ZOOM の URL は、2月15日（火）にメールで一斉配信いたします。

### ◆大会自由研究発表内容紹介（敬称略）

#### 第 1 分科会〈子どもの発達援助実践の検討〉 司会：吉岡 福井

- ① 荒木 実代（神戸医療福祉大学、武庫川女子大学大学院博士後期課程） 会場発表  
「淡海学園（児童自立支援施設）の取り組み ―子どもの発達援助を通して考えられてきたこと―」
- ② 加藤 恵美子（大阪府中学校教員） オンライン発表  
「小中連携で子どもたちを育む ―施設分離型での小中一貫の取り組みから―」
- ③ 北川 健次（滋賀県近江八幡市立島小学校） オンライン発表  
「ほんとうの自分を見つめて綴る」

武庫川臨床教育学会  
<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558  
兵庫県西宮市池開町 6-46  
武庫川女子大学教育研究所内

電話番号：0798(45)9866  
メール：[mukogawarinkyo@yahoo.co.jp](mailto:mukogawarinkyo@yahoo.co.jp)

## 第2分科会〈援助職養成の今日的課題〉 司会：小谷 岩崎

- ① 長谷 範子（花園大学） 会場発表  
「大学における学生支援と教職員の学生理解」
- ② 佐藤 奈美（武庫川女子大学大学院修士課程） 会場発表  
「保育実習における「積極性」の意識についての一考察  
—フォーカスグループインタビューを通して—」
- ③ 二羽 礼（東大阪大学） 会場発表  
「保育課程の大学教員としての臨床教育学的あり様の模索  
—援助職養成研究グループ第1回学習会の報告と振り返り—」

## 第3分科会〈臨床の場において探求することを考える〉 司会：吉益 石井

- ① 上田孝俊（武庫川女子大学） 会場発表  
「援助職者の意識形成過程について  
—東日本大震災・放射能汚染地域での子育て課題に応答した援助者への聴きとり調査から—」
- ② 藤原直子（音楽療法士、武庫川女子大学大学院修士課程） 会場発表  
「音楽療法の現場で生じるそれぞれの関係性  
—保育士と障害児を育てる母親との関わりに着目して—」
- ③ 田崎由子（大阪綴方の会） オンライン発表  
「歴史の中へ「今」を探しに行く作業  
—P・モディアノ『1941年。パリの尋ね人』を読みながら—」

※ 3つの分科会を設けて討議する予定です。

※ 時間配分は、発表 20 分、質疑応答 15 分です。

※ 各発表者の発表形態については申し込み時のものです。

※ オンライン開催となったため、会場発表を予定していた方もオンラインでの発表が可能です。また、発表者に限り、会場発表を希望される方がございましたら、対応いたしますので、事務局まで連絡をお願いします。

◆ 開催方法を変更しましたので、前号ニューズレターの内容を一部訂正し、再度ご案内いたします。

**日時：2022年2月20日（日） 10:00～17:00（受付 9:30～）**

**方法：オンライン開催となりました**

※自由研究発表を予定されている方のみ会場での発表（Zoom 配信）が可能です。事務局まで連絡ください。

**日程**

9:30	10:00	12:00	12:45	13:30	15:00	17:00
受付	自由研究発表	休憩	総会	シンポジウム（1）	シンポジウム（2）	

**参加費：**会員、準会員、武庫川女子大学の学生・院生は無料。非会員は1000円。

※ 非会員の方は、参加費をゆうちょ銀行の振替口座（口座番号：00940-3-224555、加入者名：武庫川臨床教育学会）に「研究大会参加費」と備考欄に記入の上、2月14日（月）までにご送金ください。

## ◆ 研究大会参加の方法について

- ① 事前参加申し込み制です。**2022年2月14日(月)までに、次のGoogleフォームURLからお申込みください。** <https://forms.gle/hG9aouiT5w6Eyswm6>

スマートフォン等で右のQRコードを読み込むと、フォームに直接アクセスします。 →

※ メール及びFAXでも申し込みは可能ですが、可能な限りGoogleフォームからお願いします。メール：mukogawarinkyoo@yahoo.co.jp FAX：0798-45-9866

※ メール・FAXの方は、「会場参加」か「オンライン参加」かを明記してお送りください。



- ② 参加申込をいただいた方には、オンラインでの参加方法、発表要旨集録をお送りします。

## シリーズ：私と臨床教育学⑪

### 臨床教育学の途について

二羽 礼

私が早々にこちらへ寄稿させていただくのはおこがましいようで恥じ入る思いですが、機会を賜りまして感謝申し上げます。

私は、自分が臨床教育学の場においてもよいのだろうかとても不安でした。けれど、昨年10月に行われた日本臨床教育学会でのシンポジウム「臨床教育学の概念と方法」における「実践」と「臨床」についての議論を受けて、改めて「臨床」とは何かを私なりに実感とともにつかみたいと思うようになりました。

遡ると、大学院で学びたいと思うようになったきっかけの一つは、子どもとのふれあいの中で、子どもの主体性がはたらき出す瞬間をつかんだといえる感触を得ながら、それがどのようなことなのか分からないことでした。再びその瞬間に立ち会いたいと思っても、自分の状態によっては逃げてしまい、つかもうとすればするほど遠く感覚もありました。それは保育の技術（テクニク）であるよりも技（アート）であり、保育者の人間そのものが問われており、現象だけを追っていても見えてこないという感じがありました。

修論のテーマである「人間性」は、あれこれ迷いながら保育所保育指針に目を通している際に出会いました。修論を書き進めていく上で十数年前の卒論を見返す必要があったことや、修了後に読んだり考えたりしてきたことも思い返すと、私はずっと「自覚」について考えていたのだということに最近になって思い当たりました。以前は自分に縛られ、自分に苦しみながら「自覚」を求めていたため、「自覚」できずにいたのではないかと思います。図らずも保育の現場に入り、子どもという「他者」に出会えたことは本当に幸いでした。

木村敏は、精神病理学において西田幾多郎の思索を指針に考察し、著書の中で次のように語っています。「哲学としての現象学が第一次的には思索者自身の問題を問うのに対して、精神医学的な現象学が問題にするのは精神科医にとっては他者である患者のあり方である。精神医学的現象学が哲学的現象学の単なる応用に終わったり、患者自身による自己省察のいわば現象学的『代執行』に過ぎないものとなってしまったりしないためには、医者と患者という自他の『あいだ』が、医者にとっての現象学的な『自覚』の成就する場所として見出されなくてはならない」。「精神病理学者が議論の基盤に置いている精神医学の臨床では、そこに与えられる患者という他者の様態は、彼と治療関係をもつ精神科医が誰であるかによって根本的に変わる」。

人は、相手から受けた印象や感じをもとに相手を判断しますが、その印象や感じは、自他の関係における相手のあり様であるとともに、自分自身のあり様でもあります。修論を書き終えてからの私は、「私が子どもをどのように捉えるか」だけではなく、「子どもが私という存在をどのように経験しているか」ということにも自覚的でなければならないと考えるようになりました。それは、私と共にあることでその子どもが主体的であることができているか、それとも私が主体的であることを妨げてしまっていないかということであり、実感を伴った相手理解においては、相手に感じる自分が自分を感じることであり、自分が感じていることがそのまま相手を映し出しているといえます。

臨床とは、相手の傍らにいて、互いにはたらきかけ合う関係に入ることであり、そのことを自覚して、相手を感じるとともに自分を感じることを他者理解と自己理解とを可能にするのではないのでしょうか。そして、保育者と子どもの関係は非対称であるからこそ、保育者は自身の影響の大きさをふまえて自覚を研ぎ澄ませる必要があると思います。

中村雄二郎は『臨床の知とは何か』において、「実践とは、従来しばしば一般的にそう見なされてきたように、主体が機械的、一方的に対象に働きかけてそれを変えることではなく、また、多くの〈弁証法的思考〉が強調したように、自己と他者や世界との、また理論と実践との形式的な（それゆえに何でも含まれてしまう）相互性から成るものではない。実践とは、各人が身を以てする決断と選択をとおして、隠された現実の諸相を引き出すことなのである」と述べています。それが可能になるために、「〈能動的に〉、〈身体をそなえた主体として〉、〈他者からの働きかけを受けとめながら〉」、つまり、「パトス的・受苦的な存在」として、「いっそう具体的なもの、現実と深くかかわろうとすること」、かかわっていることに自覚的であることが求められると考えます。

「臨床とは」「実践とは」「自覚とは」・・・私の臨床教育学の学びはまだ始まったばかりです。ずっと逃げ腰、及び腰だったことを“自覚”して、これまでを取り返すべく努力してまいりますので、先輩諸先生方のご指導を賜りたく心よりお願い申し上げます。

最後に、2021年度より保育者から大学教員へと職が変わりました。当初は、保育園の子どもたちと毎日のように小さくも可愛らしさあふれる物語を紡いでいたことが懐かしく、寂しくもありました。けれども今は、授業や実習指導、課題のやりとりを通して、また、一緒に泣いたり笑ったりもしながら、学生とお互いの人に触れるようなかわりの中で、学生が生きてあることを感じとるができ、それによって私も生かされております。

出会いの一つひとつに感謝して、一步一步邁進してまいります。

## 編集後記

▶コロナ禍の生活が3年続いています。医療従事者のみならず対人援助職の仕事に携わる多くの方はまさに感染の不安にさいなまれながらも「命がけ」でお仕事にかかわっておられることと思います。そうした中で16大会は「コロナ禍」の今と臨床教育学を正面にかかげて開催いたします。▶今回はオンライン大会での開催になりますが、二羽さんの論稿にあるように「臨床とは」「実践とは」「自覚とは」等などじっくりと論議したいと思います。武庫川臨床教育学会の今後の方向も討議する重要な大会になると思います。みなさんの参加をお待ちしています。（文責：吉益）